

札幌大学附属総合研究所

NEWS LETTER

No.3

- 所長挨拶 2
- 2011年度 総合研究所事業の概要 3
- 2010年度 総合研究所事業の概要 4
- 2010年度 総合研究所共同プロジェクトの概要
共同プロジェクト① 5
共同プロジェクト② 6
共同プロジェクト③ 7
- 2010年度 総合研究所講演会の概要
第1回(9月25日開催) 8
第2回(11月10日開催) 9
- 2010年度 総合研究所刊行物紹介 10~11
- 2010年度総合研究所日誌 11
- 2011年度総合研究所講演会
第1回(10月15日開催) 12
第2回(11月5日開催) 12



ドストエフスキーと現代―黙過と共苦―
講師 東京外国語大学学長
亀山 郁夫氏

2010年度第1回札幌大学附属総合研究所講演会



札幌大学附属総合研究所 所長
松本 源太郎

博士(経済学)
2011年(平成23年)4月札幌大学
附属総合研究所所長に就任。

総合力を高めて成果を問う

2年前、札幌大学の研究力の向上と研究の公開を目指して総合研究所が発足した。これまでの学部附属の4研究所を統合した研究組織である。この経緯については、初代研究所所長桑原真人先生の記事に詳しい。

発足以来これまで、シンポジウムには一般市民を含めて多くの参加者がありおおむね好評で、総合研究所の2種の紀要『札幌大学総合論叢』と『札幌大学総合研究』は、それぞれの特徴を生かして刊行されている。一般読者向けの啓蒙を狙った『BOOKLET』もよき書き手を得て品切れ・増刷のシリーズもあり、研究所の出版事業は順調である。

開所以来課題とされてきた文字通りの「総合研究」は、共同研究(共同プロジェクト)として成果を上げ、2年間の研究が公開される段階であり、その後に続く共同研究の成果にますます期待が高まる場所である。そのような活動の拡大と深化を支えるホーム・ページが開設されたことも研究所の活動に心強く思うところである。これも、初代所長、副所長の女子短期大学部長谷部先生、経営学部鶴先生のご尽力に負うところが大きい。

大学は教育力とそれを担保する研究力・社会活動の総合力が求められ、総合研究所の運営には見識と調整力が必要であるが、幸い、運営委員の先生および副所長は本学を代表する学識の持ち主であり、調整力抜群の方々である。開所3年目を迎え、本来の目的である札幌大学の研究力を開かれたシステムでいっそう進展させ、総合力を高めて成果を問いたいと願っている。本学141人の研究者のみならず、多くの研究者が寄り来たりて活発な議論を闘わせる学舎の中心となるよう総合研究所の運営に努力する所存である。

2011年度 総合研究所事業の概要

札幌大学附属総合研究所 所長 松本 源太郎

2011年度総合研究所の事業は、「総合」と「研究」というキーワードに「公開」をプラスして展開される。これは開所当時の大事な理念であり、これなくしては、既存の4研究所を統合した意味がない。これまでのシンポジウムには一般市民を含めて多くの参加者があり成功した企画であったと思う。今年度も東日本大震災を念頭に置いた企画を進めている。総合研究所の2種の紀要『札幌大学総合論叢』と『札幌大学総合研究』は、それぞれの特徴を生かして発行が継続されている。一般読者向けの啓蒙を狙った『BOOKLET』もよき書き手を得て、研究所の出版事業は順調である。

開所以来の課題である「研究の総合化」は、共同研究（共同プロジェクト）として成果を上げ、2年間の研究が公開される段階であり、その後続く共同研究の成果にますます期待が高まる場所である。これらの活動を支えるホームページも開設された。以下、今年度の事業計画を列挙し、みなさんのご協力をお願いする次第です。

共同プロジェクト

- ・現在進行中の共同プロジェクト

①小山グループ:3年計画の最終年度。

報告書作成準備状況の確認

②浅野グループ:2年計画の最終年度。

報告書作成準備状況の確認

- ・22年度終了の共同プロジェクト

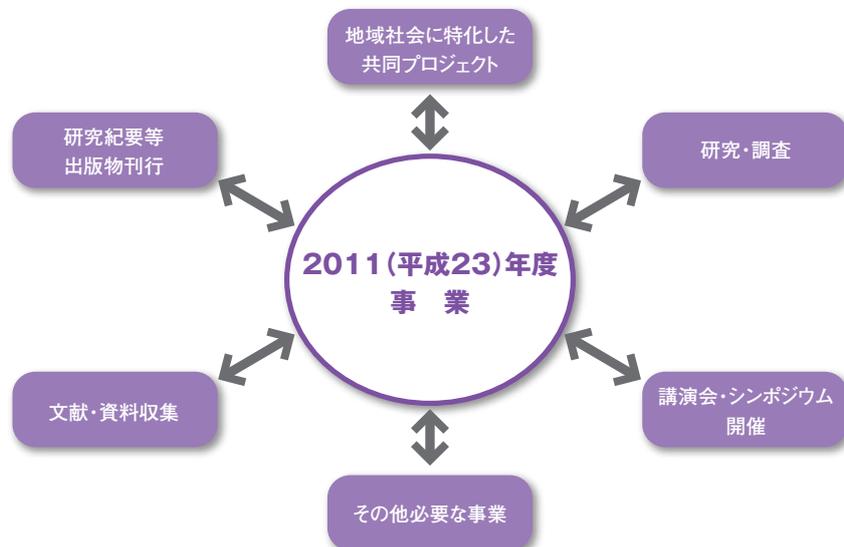
①川上グループ:23年度末刊行予定の『札幌大学研究叢書』第2号に研究成果を掲載することで準備を進める

講演会の企画・開催

- ・2回開催することで企画する

印刷物の刊行

- ・『ニューズレター』第3号:講演会での配布に向けて編集の準備を進める
- ・『BOOKLET』第4号、第5号:平成23年10月、平成24年3月刊行予定。
- ・『札幌大学総合論叢』第32号、第33号:平成23年10月、平成24年3月刊行予定。
- ・『札幌大学総合研究』第3号:平成24年3月刊行予定。
- ・『札幌大学研究叢書』第2号:平成24年3月刊行予定。



2010年度 総合研究所事業の概要

札幌大学附属総合研究所 副所長 長谷部 宗吉

(1)2010年度は二回の講演会が開催された。いずれも「道カレッジ連携講座」に認定され多数の一般市民、また学生、教職員が参加した。

①第1回 開催日 平成22年9月25日(土)

15:00～17:00

- ・ テーマ ドストエフスキーと現代 –黙過と共苦–
- ・ 講師 亀山 郁夫 東京外国語大学学長
- ・ コメンテーター 望月 哲男
北海道スラブ研究センター教授
- ・ 司会 鈴木 淳一 札幌大学外国語学部教授

②第2回 開催日 平成22年11月10日(水)

10:40～12:10

- ・ テーマ 高知県民の北海道開拓
–北見・北光社を中心に–
- ・ 講師 白井 暢明
旭川工業高等専門学校名誉教授



(2)札幌大学附属総合研究所に係る研究助成

平成22年度は、共同プロジェクト新規申請1件及び継続申請2件があり、下記の通り新規1件を採択、2件を継続とした。

(a)新規(1件)

- ・ 研究代表者 浅野一弘(法学部 教授)
- 研究課題 「北海道をめぐる現状と課題–行政学・経営学・経済学的アプローチによる分析を中心に–」
- 助成額 1,000,000円 研究期間2年間

(b)継続(2件)

- ・ 研究代表者 川上 淳(文化学部 教授)
- 研究課題 「地域の役割と補完性原理–将来の地域のあり方とは–」
- 助成額 1,000,000円 研究期間2年間の2年目
- ・ 研究代表者 小山 茂(女子短期大学部 教授)
- 研究課題 「地域活性化に関する研究」
- 助成額 1,000,000円 研究期間3年間の2年目

(3)札幌大学附属総合研究所の刊行物及び広報誌

出版物及び広報誌については「2010年度 刊行物紹介」(10頁～11頁)を参照のこと。

共同プロジェクト①

「地域の役割と補完性原理 －将来の地域のあり方とは－」

研究代表者 文化学部教授 川上 淳

我々の共同プロジェクト「地域の役割と補完性原理－将来の地域のあり方とは－」では、近年、「地方分権化」について考察を深めるためのキーワードとして注目されている「補完性原理」という概念を念頭に置きながら、北海道を中心とする諸地域において、これまで地域が果たしてきた役割、地域とは何だったのかを検証し、ひいては将来において地域の果たすべき役割、地域のあり方とはいかなるものが望ましいのかといった点について展望することを目的とし、2年間にわたって共同研究を進めてきた。

プロジェクト最終年度となった2010年度は、3回の研究会と1回の研究打ち合わせを開催した。とくに第1回研究会では、外部の有識者として福島大学の森良次氏を講師にお招きし、ドイツにおける地方行政の役割・あり方について学ぶ機会となった。各研究会および打ち合わせの内容は以下の通りである。

第1回研究会 2010年6月24日(木)

報告者: 森良次 福島大学・経済経営学類・准教授

「1850/60年代西南ドイツ・ビュルテンベルクの時計産業振興策－アメリカ互換性部品技術の導入か、それとも中小産業経営の保全か－」

第2回研究会 2010年8月30日(月)

報告者: 秋山勝

「沖縄近代の地域と民族(エスニシティ)－北海道との比較の視点から－」

第3回研究会 2010年11月27日(土)

報告者: 横本真千子

「インドネシアの女性家事労働者－バンドンの労働者派遣業者の事例－」

第1回研究打ち合わせ 2011年3月11日(金)

「研究成果の刊行について」

これらを通じて、「補完性原理」という概念の意味についての理解を深め、共通の認識を得るとともに、その共通認識のうえで、共同研究者がそれぞれ実証的な研究を進展させてきたのがこの2年間の活動である。

これら共同研究の成果については、総合研究所『研究叢書』第2号(本年度末刊行予定)として発表できるよう現在準備を進めている段階である。また、成果の一部については、今年度春学期の経済学部開講科目「経済学特論IV」において、共同研究者のオムニバス授業の形で、学生教育に対しても役立っているところである。この講義は、テーマを「補完性原理と道州制について」とし、授業の前半では補完性原理に基づく地方分権の先駆的な地域とされるヨーロッパの場合を例としながらその展開過程を明らかにし、授業の後半では道州制導入のモデルケースとされる北海道の実態について取り上げている。

北海道をめぐる現状と課題 —行政学・経営学・経済学的アプローチによる分析を中心に—

研究代表者 法学部教授 浅野 一弘

2010年度からスタートした、「北海道をめぐる現状と課題—行政学・経営学・経済学的アプローチによる分析を中心に—」と題する札幌大学附属総合研究所の共同プロジェクトは、2年目の最終年を迎えようとしている。メンバーは、地方行政を専攻分野の1つとしている法学部の浅野一弘（研究代表者）に比べ、地域経営の専門家である佐藤郁夫・経営学部教授と地域経済政策を専攻する松本源太郎・経済学部教授の3人となっている。

この「北海道をめぐる現状と課題—行政学・経営学・経済学的アプローチによる分析を中心に—」の目的は、行政学・経営学・経済学と、専門分野を異にする研究者がつどい、北海道を総合的に研究することにある。具体的には、それぞれが長年積みかさねてきた、北海道の行政・経営・経済に関する研究業績をもとに議論しあうことで、これまでにない、きわめて独創的な分析の枠組みを提示しようというのが、本プロジェクトの最大のポイントといえよう。それによって、従来の“たこつぼ”的な研究手法では具現化できなかった、北海道の長所と短所が浮き彫りになってくるにちがいない。これは、札幌大学附属総合研究所のめざす方向性—「より高領域でより綿密な、かつ創意に満ちた地域研究を展開する」—と完全に合致していると自負している。

だが、こうしたところみとは裏腹に、残念ながら、1年目は、3人のメンバーがともしつどい議論しあうというよりも、各自が、それぞれの分析の視点をいままで以上に深く掘り下げるという部分に力点がおかれた。そのため、2010年度は、従来の研究手法を打破できなかった側面がないわけではない。しかしながら、これまでの研究手法を維持しつつも、3人がともに、行政学・経営学・経済学の3つの視点をつよく意識し、調査・研究にあたったことはいうまでもない。

さて、最終年である2011年度は、従来の北海道に関する研究手法である、観光、企業、行政、金融、経済、政治、農業、文化、歴史といった分野ごとの領域による“縦割り”のアプローチをこえるあらたな方策の確立に時間を割きたいと考えている。こうした学際的なアプローチを採用した本研究成果は、北海道関連の研究者のみならず、実務家にとっても、大きなインパクトをあたえるはずだからだ。

今後、「北海道をめぐる現状と課題—行政学・経営学・経済学的アプローチによる分析を中心に—」と題する本研究では、観光、企業、行政、金融、経済、政治、農業、文化、歴史など、各界で活躍するゲストスピーカーをできるかぎり数多く招聘し、従来の“縦割り”の視点を突き崩すような研究会の開催を予定している。くわえて、共同で、全道各地に足を運び、ヒアリング調査を実施することも想定している。さらに、各メンバーが1年目であぶりだした課題を的確に整理しつつ、最終報告書の作成にとりかかっていくつもりである。そして、この最終報告書が、疲弊した経済状態におかれた北海道にとっての有益な処方箋となることを期待していただきたい。



地域の活性化に関する研究

研究代表者 女子短期大学部教授 小山 茂

平成22年度の取り組み、および、平成23年度の現状を報告する。

1) 地域・商店街の活性化について

地域住民の「安心生活の実現」の視点に立った暮らしの安定、利便性に関する具体的なニーズの把握を試みた。特に暮らしに関しては地域医療システムとの関連で住民ニーズの掘り起こしを目的に、10月に公民館で開催された「サロン合同交流会」に参加した地域住民を対象に、プレアンケート調査を実施した。内容を下記に示す。なお、①～③までは同一回答用紙、④のみ別回答用紙とした。

①月単位の日常生活について

買物、趣味・娯楽、通院の行動（頻度・移手段）および居住満足度を調査した。

②月単位の医療利用について

現在利用している医院、病気の際の利用予定医院、救急車の利用、健康不安などを調査した。

③月単位の商店街利用について

地元商店街の利用について、食料品・家電・雑貨・衣類、および地域・商店街で必要なものを調査した。

④1週間の日常生活について

1日の行動を記録する調査を7日分（いつ、だれが、どんな手段で、どこへ、目的、どうだった）行った。

その結果、配布数は126人（①～④）、回収数は、月単位34人（①～③）・1週間17人（④）。回答者の平均年齢70歳であった。

①買物：週2～3回、趣味・娯楽：週1回、通院：月1回が多かった。居住満足度は25人以上が満足と回答した。また、100点満点による評価点の平均は78点であった。

②医療関係については、内科27人、眼科19人という利用状況であった。救急車利用では6人が利用していた。

③食料品：フレッティ大丸10人、家電：ヤマダ電機8人、雑貨：ホームック・ヨーカドー3人、衣類：ヨーカドー3人という

利用状況であった。

④この調査は、非常に回答が面倒であった。回答の集約は非常に難解であるが、日常生活で、行動記録を取るものは何かを把握する事ができた。結果については平成23年度色々な分析を試みる予定である。

2) インターネットを利用した商店街活性化について

（札幌大学附属総合研究所NEWS LETTER No.2参照）

①「商店街クーポン付PR誌作成事業」とKuLeBaの情報統合については21年から引き続き行っている。

②リクルート社のコマチャライザーを利用して、6店舗にインタビュー調査を行い、コマチャを作成した。その結果を、商店街の理事会で紹介した。反応は良く、他店舗でも実施したいとの依頼を受けている。

③Google Appsを利用した商店街の情報活用tsukisamu.netを立ち上げ、商店街および商店街の関係者が地域で活動している予定および商店街が公開している書類などを掲載し、運用している（メンバー以外非公開）。

3) 札幌大学生協同組合と短大の販売実践について

（札幌大学附属総合研究所NEWS LETTER No.2参照）

①Google Appsを利用した情報活用として短大でも月1回第3土曜日に「協同郷土」(<http://www.kyodosu.com>)という販売実践を行い、情報活用方策を検討している。現在、twitterを利用した広報活動も展開中である。

②企業・団体連携として、株式会社ウイルコーポレーション、株式会社端谷菓子店、株式会社ほんま、特定非営利法人イクシア札幌、NPO法人ユニコーン、株式会社大地のMEGUMIにご協力いただいている。

③販売実践のための教科書作成を行っている。

最後に、今年度は発展段階と位置づけ、上記取り組みの成果向上を目指す。

2010年度総合研究所講演会の概要(2010年9月25日開催)

東京外国語大学学長亀山郁夫氏、 大いにドストエフスキーを語る

講演会司会 外国語学部教授 鈴木 淳一



▲講演中の亀山郁夫学長

闘の華々しさ、激しさは、陸続と発表される翻訳と著作が如実に物語っていよう。さながらこの格闘は、好んでゾシマの言葉を引用する哲学者レヴィナスの倫理探求に対抗しつつ、『スローター・ハウス5』の登場人物に「人生について知るべきことはすべてドストエフスキーの『カラマーゾフ』の中にある… しかしもうそれだけでは足りないんだ」と吐露させたカート・ヴォネガット・ジュニアの懊悩を引き継ぎ、決して見つからない答えを当て所なく嗅ぎ回っているかのような様相を呈している。

2010年度第1回札幌大学総合研究所講演会は、東京外国語大学学長亀山郁夫氏をお招きし、2010年9月25日(土)プレアホールで開催された。演題は「ドストエフスキーと現代— 黙過と共苦 —」であった。折角の機会なので、北海道大学スラブ研究センター長の望月哲男氏にコメンテーターを務めていただき、講演の最後には鈴木も交えて3人で意見交換するとともに、会場からの質問に応じることにした。

2004年に『ドストエフスキー父殺しの文学』が出版されるまで、衆目の一致するところ、亀山氏の本領は20世紀初頭のロシア・アバンギャルド、そしてスターリン体制下における芸術であった。衝撃的な処女作『甦るフレイブニコフ』(1989年、2009年)から『ロシア・アバンギャルド』(1996年)、『破滅のマヤコフスキー』(1998年)、『碟のロシア— スターリンと芸術家たち』(2002年)、『熱狂とユーフォリア— スターリン学のための序章』(2003年)、『大審問官スターリン』(2006年)へといたる道程は、その本領の深さと広さを証し立てている。しかし、処女作旧版と新版の「あとがき」を、そこに『ドストエフスキー父殺しの文学』の「あとがき」を挟んで比較考量してみると、この道程にはいつもドストエフスキーの影が寄り添っていたことを思い知らされる。この作家こそは、氏にこの道程を歩ませた原動力であり、いずれ氏が正面切って格闘しなければならない相手であった。

氏とドストエフスキーの格闘— とりわけ2007年以降の格

闘『罪と罰』を中心とした講演、コメント、質疑応答の2時間半は、瞬間に過ぎた。最初にいただいたレジュメは用意周到なものであり、90分の講演ではレジュメの4分の1程度しか語るができなかったかと思われる。それでも、詳細は「札幌大学総合研究所BOOKLET第3号」に譲るとして、『罪と罰』から別扱された「黙過」(見て見ぬふりをする)の罪悪性という問題を現代の災厄と結びつけて論じ、高村薫の『太陽を曳く馬』を『罪と罰』と重ね合わせながら解説する手際は、聴衆にドストエフスキーの現代的意義を深く印象づけたのではなかろうか。望月氏の適切なコメントとそれに対する亀山氏の応答はもちろん、亀山、望月、鈴木の3者によるごっくばらん聴衆とのやりとりも、講演内容理解の一助となってくれたことを祈るばかりである。



▲亀山郁夫学長、望月哲男教授、鈴木淳一教授と聴衆との質疑応答の様子

2010年度総合研究所講演会の概要(2010年11月10日開催)

「高地県民の北海道開拓 —北見・北光社を中心に—」講演概要

旭川工業高等専門学校名誉教授 白井 暢明

明治期に北海道に集団で開拓移住してきたキリスト教的団体の中で、高知県から移住したのは、明治26年現浦臼町に入殖した「聖園農場(高地殖民会)」,そして明治31年に現北見市に入殖した「北光社」の二団体である。この講演では、主として北光社について論じているが、その際、特にそのリーダーの人物像に焦点をあて、聖園農場との比較を視野に入れながら、精神的、宗教社会学的な観点から考察している。

この両団体に共通するのは、そのリーダーである武市安哉(聖園農場)と坂本直寛(北光社)がともに、立志社で学んだ土佐の自由民権運動の闘士であり、しかも両者がその間にキリスト教に入信したこと、そして少なくとも両団体の移住の動機の中には、「北海道という新天地にキリスト教的な聖村を作る」という理想が含まれていたことである。

結果的には、両団体ともに未開地の開墾とその後の地域発展の基礎は築いたものの、キリスト教教材建設の理想は挫折した。しかし、キリスト教信仰を背景にした人材の教育・育成とそれを媒介とした地域の精神文化の向上への寄与という側面ではかなりの相違を認めることができる。その最大の原因は、両団体のリーダーのパーソナリティの相違にある。

当時高知県選出の国会議員であった武市安哉は、純粋なキリスト教として政治世界の不浄さを受け入れることができなかつた。そこで彼は、郷里の土地の狭さによる貧窮農



▲講演中の白井暢明名誉教授

民の救済を単なる外的、物質的な救済ではなく、新天地の開拓とキリスト教的教育が一体化した新たなコミュニティ形成による内面的な救済を考え、それが北海道への移住開拓の動機となった。彼は移住して2年もたたずに急逝したが、彼の豊かな人格とキリスト教的教育への情熱は、特にこの団体のメンバーに多かったインテリたちに大きな影響力を与え、後に北海道各地に雄飛して地域の発展に貢献する多くの人材を輩出した。

一方、坂本龍馬の甥として生まれ、高い英語能力と言論・文筆の才能に恵まれた坂本直寛は、同志武市の事業に触発されながらも、キリスト教徒としての倫理的なコミュニティ形成への志向と同時に、彼独自のすぐれた政治思想を持ち、それが北光社立ち上げの理論的根拠になった。彼が移住前に著した文章には、北海道がどのような国づくりをすべきかについて、まさに現代にも望まれるべき“政治的自治”への

志向が格調高く語られている。しかし、実際に移住した後の彼は、すぐに北光社のリーダーとしての責任を放棄するという不可解な行動を取った。その理由は、本来“理論と弁舌の人”であった彼が政治への執着を捨て切れなかったことにあると考えられる。ここに、“実践の人”であり、政治世界と決別した武市とのパーソナリティの明確な違いが表れている。過酷な自然環境の中で生き残る強靱な精神力(開拓者精神)は、理論よりもむしろ実践の中から生まれるのである。



2010年度 総合研究所刊行物紹介

■『NEWS LETTER』 No.2(12頁 2010.9.1刊)



■ 浅野一弘著『民主党政権と「地域主権」』
(札幌大学附属総合研究所 BOOKLET 第2号)
(90頁 2010.12.25刊)



■ 亀山郁夫著
『ドストエフスキーと現代—黙過と共苦—』
(札幌大学附属総合研究所 BOOKLET 第3号)
(48頁 2011.3.31刊)



■『札幌大学総合論叢』第30号(100頁 2010.10.30刊)



【論文】

植民地朝鮮における普成専門学校のスポーツ活動に関する考察 …… 金 誠
重度の肢体不自由児に対するコミュニケーション能力の向上についての一考察
—交信理論をとおして— …… 井上 繁夫

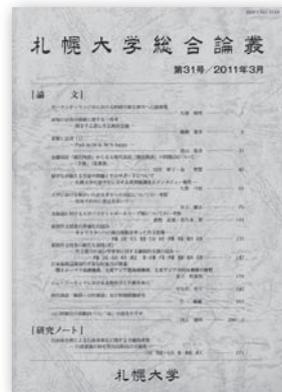
看图作文授業の追試研究(Ⅳ)—教育実習生による看图作文指導の実践—

伊藤 公紀・渡辺 聡・石田 ゆき・稲岡 亜佑美・伊藤 裕康・鹿内 信善

【研究ノート】

船史をめぐる考察②—王辰爾からの系脈を見る— …… 泉 敬史
リンゼイJ.ウェイリーによる語順に関する一考察 …… 山本 裕一

■『札幌大学総合論叢』第31号(396頁 2011.3.31刊)



【論文】

ポーランド・ウッジ市における持続可能な都市への諸施策 …… 大城 純男
表現の自由の価値に関する一再考 —聞き手と話し手と政府言論— …… 稲積 重幸
並置と迂言(1) …… 景山 弘幸

金蘭周訳『源氏物語』から見る現代語訳『源氏物語』の問題点について

—「若紫」「紅葉賀」— …… 田中 幹子・金 智慧

留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて

—札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告— …… 久野 弓枝

大学における障がいのある学生への対応についての一考察

—肢体不自由に視点を置いて— …… 井上 繁夫

北海道における大学バスケットボールリーグ戦についての一考察

…… 倉島 武徳・佐久本 智

看图作文授業の多様化の試み

—キャラクターへの視点移動を伴った作文指導—

…… 伊藤 公紀・兒玉 重嘉・石田 ゆき・伊藤 裕康・鹿内 信善

看图作文授業の新たな展開(Ⅱ)

—作文能力が高い学習者に対する継続的支援の試み—

伊藤 公紀・石田 ゆき・渡辺 聡・田籠 千夏・伊藤 裕康・鹿内 信善

日本海周辺諸国の平和友好協力の推進 …… 金子 利喜男

ニュージーランドにおける鳥類保全と生態系復元 …… 早矢仕 有子

現代漢語「動詞+目的賓語」及び相關問題研究 …… 王 鳳蘭

山口明徳氏の助動詞「つ」「ぬ」の説をたず …… 川上 徳明

【研究ノート】

自治体合併による行政効率化に関する予備的考察

…… 山田 玲良・石井 聡・桑原 真人

■『札幌大学総合研究』第2号 (301頁 2011.3.31刊)



【論文】

- 情報公開-企業・団体に関する情報の公開と保護- 上机 美穂
- 「政治主導」の法的考察 藤巻 秀夫
- 日米交渉2010年とアジアの最新国際情勢 御手洗 昭治
- 日本人の哲学-中世期の主脈- 鷺田 小彌太
- 韓国語訳「源氏物語」の巻名について 田中 幹子・金 智慧
- ロシア文化史におけるニコライ・メネルの音楽 高橋 健一郎
- 越境と折衝: ジェン・パラヒリの小説におけるディアスポラの身体とアイデンティティ 渡部 あさみ

【講演】

- 「満州開拓」における北海道農業の役割 白木沢 旭晃
- 高知県民の北海道開拓-北見・北光社を中心に- 白井 暢明

【研究ノート】

- 北海道と道州制-北海道道州制特区成立の政治過程 武岡 明子

【書評】

- 石井 聡著『もう一つの経済システム』 石坂 昭雄
- 八畝 幸信著『利用者指向に基づく経営情報論の再構築』 向原 強
- 田中 幹子著『和漢・新選朗詠集の素材研究』 渡辺 さゆり

【評論】

- 2010年の北海道 東原 文郎・金沢 恵理・藤巻 秀夫・浅野 一弘・岩堀 洋士・川上 淳・横島 公司

2010年度 総合研究所日誌 (2010年4月~2011年3月)

2010年

- 5月10日 第1回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.平成22年度総合研究所法務部委員(1人)の交替が報告される。同2.平成21年度総括が確認される。同3.研究助成小委員会報告の(1)新規の共同プロジェクトの募集、(2)2件の継続の共同プロジェクトの確認。同4.『札幌大学総合論叢』の総合研究所への移管に伴う編集体制が確認される。同5.総合研究所ホームページは、大学の基本方針が固まるまで延期することが確認される。
審議事項1.旧学内研究所からの引継ぎが確認される。同2.平成22年度事業について確認される。同3.平成22年度共同プロジェクトの採択決定(新規1件 研究代表者 浅野一弘グループ、継続2件 同川上淳グループ、同小山茂グループ)。同4.『札幌大学総合論叢』第30号の発行が了承される。同5.『BOOKLET』第2号の発行が了承される。
- 6月14日 第2回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.広報小委員会の報告がされる。同2.総合研究所の顧問として3人が就任し委嘱することが報告される(石坂昭雄氏、網島不雄氏、森泉氏)。同3.北海道新聞の読書欄に『研究叢書』第1号が紹介される。
審議事項1.総合研究所の客員研究員3人の受け入れが了承される(浅田政広氏、金沢恵理氏、横島公司氏、受入期間平成22年6月1日~平成23年3月31日)。同2.『ニューズレター』第2号の発行が了承される。同3.『BOOKLET』第3号は9月25日開催の総合研究所講演会の亀山郁夫氏の講演を掲載することが確認される。また、第4号以降は、広報小委員会で検討することとする。
- 7月26日 第3回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.第2回・第3回広報小委員会報告がされる。同2.三大学院共同シンポジウム発足経緯及び記念論文集を発足10周年の次年度に刊行することが確認される。
審議事項1.『札幌大学総合論叢』第30号の刊行が了承される。同2.『札幌大学総合研究』第2号の刊行が了承される。同3.2010年度総合研究所講演会が了承される(第1回9月25日開催、第2回11月10日開催)。同4.総合研究所ホームページは大学全体のホームページの見直しを行うため、2010年度の製作を取りやめることを確認する。
- 9月25日 第1回総合研究所講演会を開催する。
(テーマ「ドストエフスキーと現代-黙過と現代-」講演 亀山郁夫氏 東京外国語大学学長) コメンテーター 望月哲男氏 北海道大学スラブ研究センター教授)
- 10月25日 第4回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.共同プロジェクトへの研究室の貸与を許可する旨の報告が

- される。同2.総合研究所の書籍刊行物への日本図書コード(ISBN)の申請に伴う付与承諾の通知があった旨の報告がされる。
審議事項1.『札幌大学総合論叢』の所管の委員会について、投稿規定を改正し総合研究所運営委員会に変更することが了承される。
- 11月8日 第5回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.『BOOKLET』第2号について第5回広報小委員会で原稿の確認を行った旨の報告がされる。同2.『札幌大学総合研究』第2号について第5回広報小委員会で投稿予定調査結果、掲載項目案の論文の文字数などを確認した旨の報告がされる。
審議事項1.平成23年度予算(案)が了承される。同2.札幌大学総合論叢投稿規定の改正案が了承される。
- 11月10日 第2回総合研究所講演会を開催する。
(テーマ 高知県民の北海道開拓-北見・北光社を中心に- 講師 白井暢明氏 旭川工業高等専門学校名誉教授)

2011年

- 1月24日 第6回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.2010年度総合研究所第2回講演会が開催された旨の報告がされる。同2.『札幌大学総合研究』第2号の掲載項目及び原稿の確認を広報小委員会でを行った旨の報告がされる。同3.『札幌大学総合論叢』第31号の原稿の確認を広報小委員会でを行った旨の報告がされる。同4.『BOOKLET』第3号の原稿の確認を広報小委員会でを行った旨の報告がされる。同5.平成23年度予算(案)をヒアリングで説明した旨の報告がされる。
審議事項1.総合研究所の客員研究員の期間の延長が了承される(浅田政広氏、金沢恵理氏、横島公司氏、受入期間平成23年4月1日~平成24年3月31日)。同2.共同プロジェクトへの研究室の貸与の期間の延長が了承される。同3.『札幌大学総合研究』及び『札幌大学総合論叢』の2種類の同様の名称の出版物について、各学部の要望を聴取することを確認される。
- 3月28日 第7回総合研究所運営委員会を開催する。
報告事項1.総合研究所出版物(『札幌大学総合研究』第2号、『札幌大学総合論叢』第31号、『BOOKLET』第3号)が3月末に発行することが報告される。同2.総合研究所のホームページを4月に立ち上げることが報告される。
審議事項1.平成22年度総合研究所総括(案)が了承される。
- 3月31日 総合研究所出版物を発行(『札幌大学総合研究』第2号、『札幌大学総合論叢』第31号、『BOOKLET』第3号)。

2011年度 第1回札幌大学附属総合研究所講演会

「アパの経営戦略」

道民カレッジ連携講座
「環境生活コース(1単位)」指定

アパグループ40周年を機に開始した中期五カ年計画「サミット5」・頂上戦略を中心に、ホテル・マンションのこれからの展望について語る。ホテル棟数・年間マンション供給数ナンバーワンをめざす戦略と最新ホテルの客室設計など。

日時 平成23年**10月15日**(土) 14:00~15:30

講師 **元谷 芙美子** 氏 アパホテル社長

講師紹介 1947年福井県生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了。アパホテル社長。主な著書は、『私が社長です』(IN通信社、2001年)、『続・私が社長です』(IN通信社、2005年)などがある。

コーディネーター **御手洗 昭治** 札幌大学文化学部教授

会場 札幌大学プレアホール(2号館3階)



入場無料

お問い合わせ先 〒062-8520 札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
札幌大学附属総合研究所(学術情報オフィス研究支援担当)
TEL.011-852-1181(代表) E-mail su-soken@ofc.sapporo-u.ac.jp

2011年度 第2回札幌大学附属総合研究所講演会

「現代企業社会のあり方を問う ——大学生の就活実態から考える——」

道民カレッジ連携講座
「環境生活コース(2単位)」指定

「就職新氷河時代」の学生たちの就活の現状を概観し、学生たちを待ち受ける企業社会と職場生活に舞台を移し、ブラック企業の働かせ方の実例を挙げるとともに、企業は労働者にどんな働き方を求めているのかを問う。また、雇用とは何かを考え、ILO(国際労働機関)の唱えるディーセントワークの理念を手がかりに、まともな働き方の条件を明らかにし、働き方の改善の鍵は、サービス残業解消型のワークシェアリングにあることを確認する。

日時 平成23年**11月5日**(土) 14:00~16:30

講師 **森岡 孝二** 氏 関西大学経済学部教授

講師紹介 1944年大分県生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。大阪外国語大学助手を経て、現在、関西大学経済学部教授。経済学博士(京都大学)。株主オンブズマン代表、大阪過労死問題連絡会会長。専門は、株式会社論、企業社会論、労働時間論。著書としては、『強欲資本主義の時代とその終焉』(桜井書店、2010年)、『就活とブラック企業』(岩波ブックレット、2011年、編著)などがある。

司会 **豊田 太郎** 札幌大学経営学部准教授

会場 札幌大学プレアホール(2号館3階)



入場無料

お問い合わせ先 〒062-8520 札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
札幌大学附属総合研究所(学術情報オフィス研究支援担当)
TEL.011-852-1181(代表) E-mail su-soken@ofc.sapporo-u.ac.jp

札幌大学附属総合研究所 NEWS LETTER No.3

〒062-8520 札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
TEL.011-852-1181(代表) E-mail su-soken@ofc.sapporo-u.ac.jp

■編集・発行
札幌大学附属総合研究所
■発行日
2011.9